

命をつなく  
小児がん  
治療の  
現場から

小児がんは治る、子どもたちの80%近くが長期に生存する時代になってきました。すでに日本の小児がんの経験者の推定数は10万人を超え、5万人が20歳以上になっていると予想されます。

しかし、無事に小児がんの治療を終えた子どもたちのなかに、がん自体、または抗がん剤や放射線などの治療の影響によって生じたと考えられる合併症が起こることが明らかになってきました。これを「晩期合併症」といいます。

晩期合併症には、成長発達の異常（低身長、やせ、肥満、骨・筋肉の発育不良、不妊、糖尿病）、中枢神経系（脳）の異常（学習障害、脳症、てんかん）、歯の発育異常、そして学校や就職先での不適応など治療時に発育・発達の時期にあった小児がん患者さんに特徴的なものから、臓器異常（心臓あるいは肺の機能異常）、二次がん（もとの小児がんとは違うがん）などがあります。

これら晩期合併症の多くは、小児がんの種類、治療の内容（抗がん剤の種類と総投与量、放射線治療の部位と線量、治療を受けた時の年齢、そして治療に対する本人の感受性など）に関係します。

2006年に米国から衝撃的な報告がなされました。小児がん経験者

小児がんの晩期合併症

ばんきがっぺいしやう

治療後に現れる新たな症状や合併症  
抗がん剤や放射線治療が影響

晩期合併症とは、晩期合併症が  
あった人は、小児がん診断後5年  
の時点では3〜4割程度ですが、  
その後合併症をもつ人の割合は増  
加し、30年後には7割に達するこ  
とがわかりました。しかもその半  
分は対応をしないと生命にも影響  
が及ぶ合併症でした。

2017年の報告では、小児がん治療後の生存者が50歳になったときに、何らかの健康障害をもつ人の割合は99・9%におよび、93・2%が心臓・血管系の異常でした。そして50歳までに平均で約5回の重度の異常（生命を脅かす、または致死的なこと）をきたしていました。

世界中の専門家により、小児がんの子どもたちが起こる晩期合併症を減らす安全な治療法の開発が進められています。

次回は、治療を終え、社会の中心となる小児がん経験者の生涯にわたる生活の質の向上に関わる長期フォローアップについてお話しします。

● 晩期合併症の主な症状 ●

